

小林峯夫遺歌集

『途上』

(ながらみ書房)

小林峯夫は、かつて第一歌集『はまき』に載せた、生まれ故郷郡上での一揆を素材とした「宝曆挽歌」により、歌壇の注目を浴びたが、その後は歌壇とは距離をおきつつ、岐阜県の高校教育に献身的に関わった。退職後は、地域の短歌会の指導に携わる一方、長く「まひる野」の重鎮として、後進の指導に努めてきた。この歌集は五冊目となる歌集で、二〇一二年から亡くなる二〇二一年までの歌を収める。愛妻を亡くし、辛い日々を送っていた時期の歌は第四歌集『五六川』に収められているが、この歌集では、老いを自覚せざるをえない日々を詠んだ歌、孤独感の滲み出ている歌が多い。だが、どの歌にも老いの今を見詰める真摯な眼差しが感じられ、深い感銘を受けた。

さめざめと泣きはしませんが
 夜醒めて
 闇をみつめて
 いることはある
 米を研ぐ指の先に見えてくる
 さくさく
 さくさく
 われ孤独なる
 身に迫ること認めざるを
 えずいやとい
 うほど見てきた老残

(鈴木 竹志)

笹公人歌集

『終楽章』

(短歌研究社)

「喪失」という二文字が、笹公人の第五歌集である本書の中に通奏低音として流れている。大切な存在やそれまでの日常が失われていくことへの戸惑い、あるいは叶うことのない願望を、笹は隠さずに詠んでいる。手のひらに溜めたひかりをゼロに放ち生き返らせる人はいないか。命あるものは必ず死ぬが、忘却は関係性の死でもある。

自身に最も近い家族・父親を介護し、そんな父に忘れられていく現実には葛藤し苦しむ。
 「おう兄貴」真顔で呼ばれる 脳内では
 学生時代を生きている父に
 笹は、父親からの無言の愛を時間差で受け取った時に涙を落とした。
 引き出しに数多見つかる吾の記事の上
 にぼたんと落ちる涙よ
 あとがきに至るまで父と再会したいとは言わなかったが、その涙は本書で繰り返し詠まれる喪失の中で、一際存在感を放っていた。

(宮 梓一)

鯨井可菜子歌集

『アップライト』

(六花書林)

二九六首が収められた、作者の第二歌集。うけとった光おそれてこの石をわたしは飲み込んでしまいたい
 歌集冒頭の一連にある一首。婚姻契約を意味する指輪に光る石。社会的にも「光」よろこばしいこと、それを「飲み込んでしまいたい」と表現する。胃に冷たく微かな重さが残る歌である。

君という過去おそれつつ食べていると
 んぶりいっぱいのわらび餅
 この一連では〈きみ〉と〈君〉が登場する。〈君〉はかつて関係があった人だろう。おそれを感じないように詰め込んだわらび餅は甘く、喉が詰まってしまいうさだ。
 いくら丹わしわし食めば胃のなかに祖父の計報はぎうと詰まり来
 「わしわし」という威勢のいい表現がよけいに胃の重たさを感じさせる。作者は「食べる」ことで感情そのものを飲み込もうとしているのかもしれない。生活と密着した歌たちが並ぶなかで「食べる」歌が、読者の意識を強く引きつけている。

(日山 七菜子)